

父が自分の身を呈して教えてくれたことⅡ

高名 祐美

父が亡くなって半年が過ぎた。月命日の23日には実家へ行き、妹家族とともにお参りをする。私の夫は住職で、夫の読経に私達が唱和する。遺影の父は笑顔。「おう、皆集まったか」と笑顔で眺めてくれている、そんなおだやかな気持ちになる。

先日は「2分の1周期お参り」と称して、いつものように妹夫婦・甥・私たち夫婦で集まった。読経のあとには久々の食事会。妹が食事をごちそうしてくれた。父親が段々と食べられなくなってしまい、食事を食べさせるのに苦労していたエピソードを妹が笑いながら話してくれる。そんなこともあったのだなと改めて知る父の姿や言葉。父が私と妹をつないでくれていると実感できる。食事の後は、妹夫婦の旅の思い出をスライドショーでみせてもらう。妹の夫が解説してくれる。甥が口を挟んだり、妹のダメ出しがでたり、楽しいプレゼン。こんな時間を一緒にすごすのはいつぶりだろう。この光景を亡き父と母はきっと喜んでくれている、そう思って私も嬉しくなった。

いつの頃からか、妹とギスギスするようになった。そもそも、嫁いだ妹が、実家へ家族を連れてもどってきて両親と同居することになった経緯を、私はまったく知らなかった。誰が提案して、どのように決まったのか。道路の拡張工事で家を立ち退かなければならないとは父から聴いていた。場所を変えて新築した家が完成し、いざ引っ越すという段階で、妹家族が同居することを知った。驚きだった。そこから少しずつ距離ができたように思う。

同居5年目、入院生活を繰り返していた母が61歳で亡くなった。母がいなくなった実家。母を見舞う事がなくなり、元気な父とは会う機会が少なくなった。父が母亡きあと、独居とならずに生活することができるのは妹家族のおかげ。長女として申し訳ない気持ちもあったが、父のことは妹に任せきりになっていた。

元気だった父も、肺が悪くなり、在宅酸素療養するようになった。病院受診に送り迎えと付き添いが必要となり、時には自分が付き添いすることを申し出たが、妹から「(父は)私の家族ですから。家族のことは家族でやります。」とはっきり言われた。衝撃的な言葉だった。その言葉をきっかけにますます実家への足が遠のいた。

自分も娘。しかも長女。同居はしていないけれど、私だって何かしたい。そんな思いにふたをする。自分の妹、たったひとりのきょうだいなのに、気をつかう。私と妹の姉妹サブシステムは、関係線をひくならば葛藤の波波線で表現できた。

そんな関係がつらく、自分の家族をジェノラム事例検討会に事例として提出し、家族アセスメントをしてもらったりした。そこで気づいたことは実家家族の構造を3つのキーワード「サブシステム」「境界」「パワー」で考えてみることであった。

- ① 私の実家では、父より妹が権威をもって、重大なことを決めるのは妹の力が働いていること（パワー：権威、決定）
- ② 実家は妹家族の家となり、内と外との境界をしっかりと線引していること（境界）
- ③ 姉妹サブシステムが子供の頃とは変化して、妹が強くなっていること（サブシステム）

これらを意識することで、私は実家との付き合い方を変えることができた。そして、父を在宅看取りするにあたって、「長女」「姉」というこれまでもってきた役割意識を変えて関わることができた。「家族システム論」を学んでこなかったら、妹との関係にもっともっと苦しんでいたと思う。父の在宅看取りはかなわなかったかもしれない。

そして今。良い付き合いができていることに改めて感謝している。父が身を呈して、私に妹との関係について教えてくれたのだと思う。